



## 本は知識の根本（その3）

校長 佐々木 秀之

桜の花はすっかり葉桜に変わり、太陽の光を透かして見る若葉はなんともいえない青々とした美しさを見せています。96人の1年生もすっかり学校に慣れ、穏やかな笑顔が見られるようになりました。

さて、「読書の秋」には文化の日を中心として2週間の「読書週間」は広く知られていますが、「こどもの読書週間」はあまり知られていないかもしれません。昭和34年（1959年）にはじまった「こどもの読書週間」（4月23日から5月12日）は、平成13年の「子ども読書年」（2001年）を機に、2週間から3週間に期間が延長されました。

\*

読書は、子供たちが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていくうえで欠くことのできないものだといわれています。その他にも、「語彙力や読解力が身に付く」「集中力が養われる」「知識が増える」「人の気持ちが分かりコミュニケーション力が高まる」「自己肯定感が高くなる」「気持ちが安定する」など、良いこと尽くめのように感じます。

しかし、子供たちにただ「本を読みなさい」と大人が言って、自分はテレビを見ていては、子供たちは本を読むようにはなりません。自ら「読みたい」と思えるような大人の働きかけが必要ではないでしょうか。例えば、「家の中に本を置く」「読書ができるように余暇の時間を作ってあげる」「大人も読書をする」「漫画や絵本もよしとする」「読み聞かせを続ける」…。「子供に読ませる」ではなく、「自然と読める環境づくり」が大切なのだと思います。

スマホやタブレットの普及が読書離れの原因ともいわれていますが、それらを活用することも考えられます。スマホやアプリの中には絵本や小説を読めるものもあります。隙間時間で読めるため手軽であり、今の子供たちにとっては、こちらの方が読みやすいかもしれません。もちろん、視力などへの影響に気を付けることは必要ですが…。

\*

今年の「こどもの読書週間」の標語は「ひとみキラキラ 本にドキドキ」です。現在、コロナ禍にあり、なかなか大勢で集うことができません。こんなときだからこそ、一人でも楽しめる本を大いに楽しみ、子供たちに読書習慣が確立することを願っています。

